

藤原宮造営の運河から出土した小児骨

1 はじめに

藤原宮跡のSD1901Aは、宮造営に際して資材を運搬した大規模な運河と考えられる遺構であり、近年の発掘調査において、数多くの動物遺存体が出土している。このSD1901Aを埋め立てた後に大極殿など藤原宮中枢部の建物が設けられるため、出土した動物遺存体は藤原宮造営期における一括性の高い貴重な資料群といえる¹⁾。

1977年に実施された飛鳥藤原第20次の調査においても、運河SD1901Aから多数の動物遺存体が出土していた。しかし、詳細な内容が不明であったため、再整理をおこなっている。今回、第20次資料の再整理を進める中で、人骨が見つかったため、速報として報告するとともに若干の考察を加える。

2 出土人骨の所見

出土した人骨は、左側の大腿骨である。骨端部がほとんど残されておらず、管状の骨幹部のみであった。保存状態は、他の動物骨と同様に良好で、ビビアナイト（藍鉄鉱）の析出もみられない。骨には「6AJF KG33 大溝

粗砂 771215」と注記されており、運河が機能した時期の自然堆積層である下層²⁾から出土したことがわかる。

わずかに残存した近位端部を観察すると、大腿骨頭が癒合せずに脱落していることから、年齢は18歳未満と推定できる³⁾。また、大腿骨の残存長は234.3mmで、残存部位を考慮すると大腿骨最大長（M1）は約236～240mmと復元できる。この復元値を未成人四肢骨の計測値データ⁴⁾と比較すると、年齢は5～12歳程度と推定され、骨端癒合状況による推定年齢とも矛盾はない（図I-32）。

全身骨格ではなく大腿骨のみが出土したことから、関節が外れた小児の遺体の一部が運河に持ち込まれたものと考えられる。犬などの食肉目は柔らかく油分が多い含まれる骨端部を齧りとり、筒状の骨幹部を残すことが多いため、骨幹部のみという残存状況は犬による関与が示唆される⁵⁾。近位端部には円形の窪みがいくつか観察され、犬による咬み痕の可能性がある。実際に、飛鳥藤原第153次の調査で出土した動物遺存体を見ると、SD1901Aから馬に次いで犬が多く出土しており⁶⁾、造営時には遺跡周辺に犬が多く見られたと考えられる。

なお、保存状態が悪い資料やビビアナイトが析出する資料では、埋没中や取り上げ時に骨端部が抜け落ちた可能性も考慮する必要がある。しかし、出土骨の保存状態は良好であるため、この可能性は低いと判断できる。

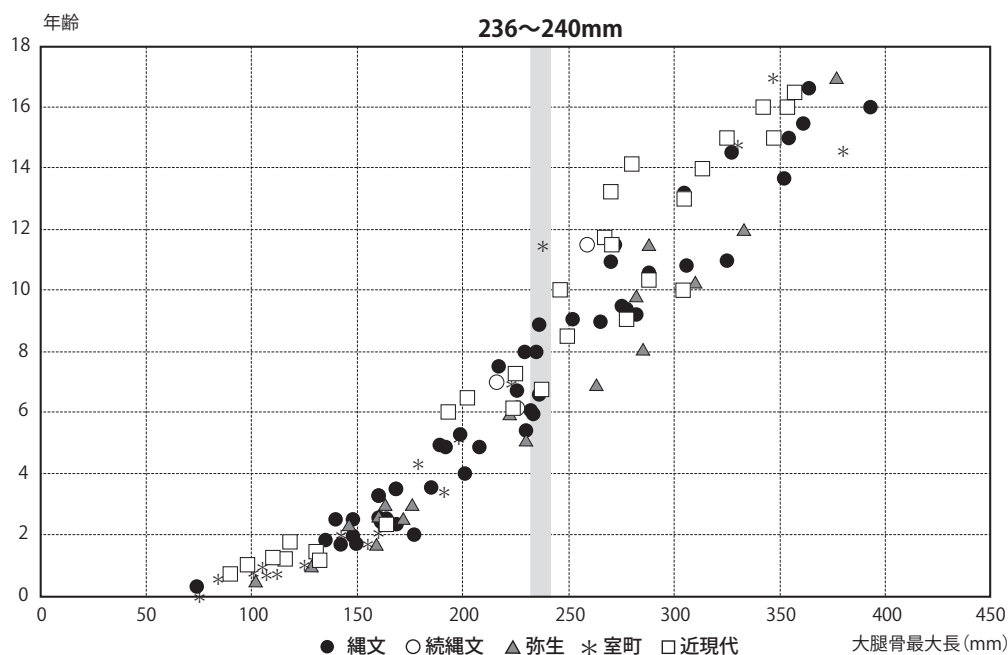


図 I-32 大腿骨最大長と年齢の相関図（註4のデータより作成）

3 考 察

古代のうち、文献史料が豊富な平安時代では、庶民は遺棄や風葬など遺体を地上に放置していたことが知られている。また犬は、遺体の一部をくわえて徘徊することがあり、子供の遺体が多かった⁷⁾。

例えば、9～10世紀の事例を抜粋すると、次のようになる。延長5年(927)に犬が小児の足をくわえて内蔵寮へ侵入したが、同様の事態は貞観19年(877)にも起きていた⁸⁾。承平元年(931)には大炊寮供御院で犬が子供の遺体をくわえていた⁹⁾。天慶2年(939)に藤原師氏宅の犬が小児の下半身を咬んで入り¹⁰⁾、天慶5年(942)には左近衛府中将曹司の近くで3、4頭の犬が子供の遺体を食べており、頭部と上半身しか残っておらず、手足はなかった¹¹⁾。応和元年(961)には造営所の犬が子供の両足を食べて入った¹²⁾。

このように、子供の遺体に関する記述が多いのは、子供の死亡率が高かったことに加えて、子供の遺体は犬が運搬しやすい大きさであったことが要因として考えられる¹³⁾。とくに子供の足がくわえられて運ばれたことが多いようで、小児の大腿骨のみが出土した本事例との関連性が示唆される。

飛鳥・奈良時代における葬制は、考古学的に把握しやすい埋葬や火葬の議論が中心であった。藤原宮が造営される7世紀末は、平安時代のような文献史料はほとんどないものの、柿本人麻呂が香久山で遺体をみて悼んだ歌を詠んでおり、香久山に遺体が放置されていたことは確認できる¹⁴⁾。出土した小児骨は、7世紀末における葬制の一端を示すものといえよう。

本資料の存在から、5～12歳程度の小児の遺体が、遺跡周辺に放置されていたと推測することができる。運河SD1901Aは、朱雀大路など宮内先行条坊の側溝を切って掘削されている。出土した小児骨は、藤原宮造営時の景観がわかる資料でもある。(山崎 健)

謝辞

人骨に関しては、水嶋崇一郎氏、鶴沢和宏氏、茂原信生氏、丸山真史氏からご教示を賜った。また、本稿の執筆にあたり、山本崇、小田裕樹、廣瀬覚、清野孝之、桑田訓也の各氏からご意見をいただいた。記して感謝の意を表します。



図 I-33 第20次調査SD1901A出土の小児人骨

註

- 1) 山崎健「藤原宮造営期における動物利用—使役と食を中心として—」『文化財論叢Ⅳ』2012。
- 2) 奈文研『藤原宮木簡二 解説』1980。
- 3) Scheuer, L., Black, S., Christie, A. 2000 *Developmental juvenile osteology*. Academic Press.
- 4) 岡崎健治『縄文・弥生・中世・近現代人の成長パターン—未成人骨格資料から探る形態発現と生活環境—』花書院、2009。
- 5) Binford, L.R. 1981 *Bones: Ancient Men and Modern Myths*. Academic Press.
- 6) 山崎前掲註1。
- 7) 勝田至『死者たちの中世』吉川弘文館、2003、西山良平『都市平安京』京都大学学術出版会、2004。
- 8) 『西宮記』定機事。
- 9) 『日本紀略』承平元年二月六日条。
- 10) 『本朝世紀』天慶二年十一月十八日条。
- 11) 『本朝世紀』天慶五年五月四日条。
- 12) 『村上天皇御記』応和元年閏三月二十二日条。
- 13) 勝田前掲註6。
- 14) 『万葉集』巻3-426。